

目的 被服を着装する場合、その色、柄、デザイン等が着装者の個性に適合しているか否かは被服の価値を大きく左右するものと考えられる。しかしその評価は趣味、嗜好や経験に頼っているのが現状である。そこで今回は前報の眉、眼に引続き鼻、口、顔型を取り上げ、官能検査を行い、個性に大きく影響する各因子を導き出すことにした。なお、これらの結果を基にして、最終的には被服の着装効果との関係を明らかにしたい。

方法 1) 本学学生222名の顔写真による鼻、口、顔型の類型化の資料を用いてSD法による官能検査を行った。この結果を数値化し、どの因子が大きく影響するかについて重回帰分析を行った。2) 上記の鼻、口、顔型に加えて眉、眼の各因子を各々組み合わせ、200種類の顔面の試料を作成し、官能検査を行い、更に顔面の各形態的因子と個性との関係を重回帰分析で明らかにすると共にクラスター分析により試料分類を試みた。

結果 1) 鼻、口、顔型について官能検査を行った結果、鼻では鼻幅の大きいものが、また口では口裂長、口厚径が大きいものが、顔型では角形が強いという傾向を示した。なお口の重回帰分析の結果では口厚径が最も大きく寄与していることが認められた。2) 顔面全体の官能値について各形容詞対ごとに重回帰分析を行ったところ、強い-弱いでは眉角度が、明るい-暗い、整っている-整っていないでは眼の面積が、あたたかい-冷たいでは眼角度が最も寄与しているという結果であった。またクラスター分析においては、強い-弱いの影響が認められ類似度53%で大きく3群に分類されたが、生体へと発展させる試料は重回帰分析結果と合わせて選出する。